

近現代日本の美容行為における眼差しの力

石田 かおり

The Force of Eyes in Modern Japanese Beauty Culture

Kaori ISHIDA

ABSTRACT

In this paper we examine the force of eyes in beauty behavior at the modernization of Japan to propose which way we shall take in the future. The policy of sanitation of Meiji government oriented modern beauty. The introduction of the concept of sanitation brought three types of eyes to form beauty standard among Japanese people. The first is the comparative sight between cultures of Japan and the other countries. Especially for the state of sanitary and infectious diseases ranks Japan in the advanced countries or not. The second is the comparative sight between individuals. Such as the exhibition of sanitation the government educated people to get advanced modern life and body. This eyes brought the mechanism to know one's own position in the society to compare oneself with the others. The result of this education and the spread of the concept of the individual, made the third type of the eyes, the inner eyes of each person, which restricts our behavior. These three eyes have been applied to our modern beauty behavior.

After the high economic growth, which had extended beauty industry, at the end of the 20th century the beauty behavior had become entirely personal daily action and now we live in the society, that one is responsible for one's own health and beauty. As they speak the 'Plastic Body'. Now we can transform our own body to any form by our own will. Furthermore the range of people, who is evaluated as beauty and who takes the action of beauty had been long time only the women suitable for marriage, has got over the limit of sex until the end of the last century, and the range about the age is going to wider and wider. In this trend we can clearly see the feature of the body : nothing is more clearly to recognize than the transformation of the body.

Then which way we shall go in the future in the action of beauty? We can use mass media to change the eyes to the body, considering how strong force the mass media has had at the penetration and shape the standard of beauty. We should circulate various image of human body without any beauty ranking. It is necessary to get out of restraint of the eyes for we live our own life in peace of our mind by diversification and making relative in the value of beauty.

近代は『視覚の世紀』と呼ばれ、近代化を推進する装置として眼差しが利用されたと言われている。このことを近現代の日本の美容行為において検証する。さらにこの検証を通じて、近代の諸制度が諸側面で破綻をきたし始めそれらを変えざるを得ない現在の社会状況を鑑みて、美容行為における今後の方向性のあるべき姿について提言をめざした考察をする。

1. 富国強兵政策が産んだ衛生思想

日本における近代化は明治維新とともに始まった。維新政府のスローガンは「富国強兵」として知られている。この標語から経済大国と軍事大国を国家の最大の課題に掲げたことを読み取ることができる。維新政府が行なったあらゆる方面での近代化は政府主導であることが共通の特徴と言える。美容行為における近代化も例外ではない。女性のお歯黒と眉落としを廃止することを例にとれば、太政官令を布告し、それでも実効がないと見れば皇后が近代化の象徴となって手本を示したことでようやく普及した。また、洋風の髷として考案された「束髪」の普及も、「大日本婦人束髪会」という組織が作られ、髪形のカatalogを作成し配布したり講演会を催したりするなどの普及活動から始まった例もある。「大日本婦人束髪会」は政府組織ではないものの、医師と雑誌記者が主唱して組織されたことから、衛生に関する国民の教育・啓蒙の性格を帯びていることがうかがわれるが、¹⁾明解にその目的を衛生と謳っている。同会は日本女性の「衛生と経済と便益」の3点のために発起したと明言し、旧来の髪型(江戸時代の髷)の衛生上の「害」を強調している。旧来の髷は自分で簡単に結うことができないために(不便)髪結い代がかかって不経済であり、お金をかけた髪形なので壊れないよう気遣って洗髪をしなくなる点が不衛生である。それに対して束髪は

自分で結うことが容易なので洗髪も頻繁にできて衛生的である。²⁾ここに「衛生」という明治維新に新たに導入された用語が登場しているが、この「衛生」の概念が近代の美容行為における眼差しの力を考える上で中心に位置づけるべきものである。

維新政府の政策によって衛生思想が導入されどのように普及したかについては、小野芳朗『〈清潔〉の近代』に詳しい。ここでは同書のほか田中聡『衛生展覧会の欲望』、鹿野政直『健康観にみる近代』、三浦雅士『身体の零度』を中心とする日本の近代社会確立期における衛生と身体をめぐる諸文献に基づいて、美容行為に見られる近代の核心的構造を明確にする。

富国強兵政策の目的は、国際的に経済力と軍事力を備えた大国になり、幕末に欧米列強諸国と締結した不平等条約を改正し、名実ともに列強国の仲間入りをするににあった。この、経済力と軍事力を高めるためには国民ひとりひとりが残すところなくすべて国家のために奉仕する体制にするのがもっとも効率よく実現できる。ここにおいて近代の「国家」と「国民」という概念が導入される。そして近代国家における「よき国民」の条件として、「健康」³⁾がにわかに浮かび上がってきた。というのも、国民ひとりひとりが健康であることは経済生産活動においても軍事活動においても絶対に必要な条件であるからだ。衛生政策が導入された背景にはこうしたことがある。

この「衛生」や「健康」といった概念の導入は国民の意識と美的価値観において以下に述べる3つの性質の眼差しをもたらした。

2. 文化的価値を比較する眼差し

まず第1の点は、新政府になって産業指導や教育その他多くの目的で海外とくに欧米から人が来日するようになり、政府関係者と一般人が

それまでほとんど見たことのなかった外国人を目撃する機会が増えた。すると、背丈や髪・肌・瞳の色などの身体的な差異が見慣れた日本人と対比されてまず目に付くようになった。産業・軍隊・教育などあらゆる点で新体制の手本にしている「先進的な」文化の住人である欧米人は身体の外見の点でも日本人に勝っていて、日本人のめざすべき手本としてとらえられた。「体格」という概念が生じた時期と相俟って、「日本人の劣った体格を改善しなければならない」という意識が芽生え、国家の急務とされた。

一般に、2つの異質の文化が出会ったときに一方が他方を一方的に崇拜する価値的な上下の意識が生じると、崇拜の対象がもう一方の文化における美的価値基準になる。明治初期の日本にもこのことが起こった。すなわち、身体においても欧米人のそれが美的価値基準となったのだ。美容行為においても欧米人の体型・髪型・顔立ち・化粧法・運動法などが憧れの対象と目標になった。美人像も変化した。文献によって明らかになっている日本の美容史上では初めて大きくはっきりした目が美人の条件に挙がった。⁴⁾ こうしてそれまでは一重瞼が美人であったが目が大きくはっきりと見える二重瞼でなければ美人とは評価されなくなった。また、目だけでなく鼻筋を通った高い鼻も重要な美的条件になり、いわゆる「彫りの深い」凹凸のある顔が美的評価の高いものになった。以後今日に至るまで、日本女性が受ける美容外科手術の順位を部位別に見ると、二重瞼にする手術と隆鼻術が一位と二位を占め続けている。こうしたことの核心には欧米人と自分たちを比較するという眼差しが存在する。体格にしても美人像にしても、「先進国」の手本との比較の眼差しによって推移してきたのが第1点である。

3. 他人と自分とを価値の点で比較する眼差し

第1点は文化や国家を単位とするものであったが、2点目は個人と個人の間での、自他の比較の眼差しである。

衛生政策が導入された背景には、幕末から明治初期にかけてのコレラの流行もあった。伝染病の流行は後進国の象徴とされ、列強の仲間入りを図る政府にとっては是が非でも撲滅せねばならないものだった。そこで各種伝染病の知識を国民ひとりひとりにまで普及し、衛生観念を植え付ける政策がとられた。伝染病知識だけでなく、体格向上と体力増強についても同時に啓蒙が行なわれた。啓蒙活動は学校教育において力が入った展開が見られるが、一般国民に対する啓蒙としては、全国でたびたび開催された「衛生演説会」や「衛生展覧会」が代表的なものだ。⁵⁾ これらの会では衛生的な生活や身体の状態を知らせるだけでなく、不衛生な状態と比較して知識が伝授された。その際、不衛生な状態によって被る害悪をできるだけ強調し恐ろしげな様相を明示することで、不衛生に対する恐怖心と嫌悪感を国民のあいだに定着させ、そのことによって衛生の概念と衛生のための知識を普及させるという手段がとられた。こうした手法は殊に衛生展覧会において顕著に見られる。衛生展覧会に行って展示されている生々しい人形や臓器と自己の身体とを比較して、人々は衛生や健康についての知識を得たというより自己安堵を得た。かくして学校教育に加えて家庭においても衛生教育は「いけません、そのようなことをしたら〇〇病になりますよ」と叱るような形で、子供の恐怖心や嫌悪感を引き出した禁止型の教育がなされることになる。この場合にも、伝染病にかかった身体と親の言いつけを守って伝染病を免れた身体との比較がなされる。

また、不衛生な個人や家庭・場所は警察が取り締まりを担当していた。伝染病にかかった家は一家全員が隔離施設に移住させられ残った空

き家は直ちに消毒された。これは不衛生に対する罰としてとらえられ、道徳的価値判断が付与された。それだけでなく、近隣に疾病を伝染させる可能性があるので政府が対策を取るということで、疾病についての社会的な責任をとらされる社会的制裁でもある。

さらに何よりも、こうしてこれまで国家に顧みられることのなかった個人の体内と家庭の内部にも社会構成員の相互監視の眼差しが導入されることになったのが、近代社会における衛生政策の最大の特徴とすることができよう。

ここに自他の比較の眼差しによって個人が自分の社会的位置づけを知る仕組みが見られる。このことは美的価値判断にも大きな影響を与えた。自分が美人であるか否か、容姿がどの程度の位置づけにあるのか、そうしたことを他人との比較によって判断する。こうしたことは個々人の内面において無意識的になされるだけでなく、美人コンテストのようにマスメディアを通じて不特定多数の大衆に共有されコンセンサスが形成される形でも行なわれ、今日まで続いている。たとえば男性における背の高さや、性別を問わず特定の集団における個人のファッションセンスの良し悪しの判断もその一例と言えよう。出会った相手の外見を自分の身体イメージと比較することは動物としての存在、いわば文化以前の段階でも行なわれているし、歴史上本論に取り上げる時代が初めてのことでない。美人評判記も以前から存在する。しかし、次の2点が新しい。

まず、美的価値基準に対するマスメディアの影響が過去最大になり、美的に一定のレベルでいなければならないという暗黙の圧力が個人にかかるようになったこと。同時にマスメディアは美的価値基準の共有化の絶大な推進力となっただけでなく、明治維新以後130年の歴史を通じて次第に数を減らしながら少数の基準に収斂し

てゆく価値基準の画一化をも推し進めた。⁶⁾次に、健康であることと、反対に伝染病にかかったときの責任が個人に帰せられるようになったように、個人的な身体の状態によって社会的責任が生じるようになったのと同様、個人の社会的地位が決定される際に当人の身体の美的状態がもたらす割合が次第に大きくなってきたことだ。⁷⁾ある程度流行に乗っていないと仲間はずれにされるので、特定の集団に属したいときにはその集団の外見的特徴（とくに服装・髪型・メーキャップ）を取り入れなければならないという状況は21世紀の今日では「常識」になっている。また、若者や子供は自分自身がまず初めに外見で判断されることをよく知っていて、「人間は外見でなく中身」という言葉を自分自身の経験から信じないことも一般的に見られる状況である。

さらに国民的衛生教育の結果、「不衛生」、「不潔」、「汚い」といった反衛生的なイメージに不可逆的に否定的な価値が与えられ、その性質を負った当人の人格や人権を全面的に否定し社会から排除する意識や行動が生じ、誤った行政が行なわれただけでなく個人のレベルにいたってはいじめの一因にもなっている。いじめには加害者と被害者の2極に別れることで、加害者側に位置づけられた者が被害者側に位置づけられた者と己を比較することで自己保全が保証されて安心する仕組みがあるが、これは衛生展覧会の見学者と同じ構図である。すなわち眼差しによる装置である。

4. 自意識の眼差し

以上が2点目の眼差しであるが、3点目は個人の内部の問題だ。近代によって新たに導入された「個人」という概念が浸透することによって自意識が生じ、結果として眼差しの力を増幅したことが第3の点である。

現代人の誰もが疑問もなく了解している「個人」という概念もまた、近代化に伴って導入された。前述の第2点で見たように、個人の身体の状態が個人の責任に帰せられるようになったことも、個人概念があって初めて成立することであるし、反対にこのことが個人の概念を浸透させる一助になったとも考えられる。すなわち身体に関する意識と個人の概念とが相俟って近代的自我像（セルフイメージ）を形作ってきたと言えよう。現在われわれが自分自身の身体を見る眼差しのうちの一体どれだけの割合がマスメディアによって共有化された価値基準に基づく眼差しなのだろうか。自我像形成の際には内在化された他者の眼差しが大きく働いている。⁸⁾ こうした動向が進んだことと、太平洋戦争後の急激な経済成長に伴う生活の利便化とともに進んだ化粧品と美容産業の拡大と普及の結果、20世紀末には美容行為は完全に日常化・個人化し、個人の美的価値は個人の責任という時代を迎えた。殊に1980年代にアメリカから流行が始まったボディコンシャスの意識は、個人の身体と美に関して完全な自己責任化をもたらし、「自分の身体は自分でいかようにも変えられる」という新たな「常識」を根付かせた。いわゆる「プラスチック・ボディ（可塑的身体）」の台頭である。これ以降メーキャップだけでなく染毛・タトゥー・ダイエット・美容外科的処置等の美容における身体変工に対する抵抗感が急速に低減し、ほとんど日常的な行為になってしまった。それに伴って醜形恐怖症・自己臭恐怖症・潔癖症といった美的価値についての自意識が大きく関わる精神的疾患も増加している。これらの症状は短絡的に衛生教育に原因を求めることも可能であるが、それ以上に重要なことは、衛生教育を通して浸透した眼差しの力が翻って個人の意識と行動を束縛した結果であることを見落としてはならない。

現在、日本の若者は世界一おしゃれであると言われている。その意味は、ファッションの美的水準として一般の水準が高く、そこからひどく（上下ともに）外れた人がほとんど見当たらないことだ。これはメーキャップに関しても同様、日本の青年と成人の女性は大多数が毎日一定程度のメーキャップをしている。⁹⁾ 日本がそれまで手本にしてきた欧米と比較すると、ファッションの水準においてもメーキャップの程度においても、高い位置にいる人と低い位置にいる人と分布に広い幅があって平均を取ると中間に落ち着くのが欧米型なら、日本では中間かそれより少し高い位置に大多数の人が収斂する分布になりその結果平均値が高くなる傾向を示す。「おしゃれでないと仲間外れにされる」、「おしゃれでないと馬鹿にされて相手にされない」。¹⁰⁾ こうした意識とそれに基づいた現実の行動が個々人の意識と行動を規制している。一見個人の自由意志と美的センスに基づいて行なわれているように見える若者の染毛や眉メイクも、よくよく当人の意識を分析すればこうした意識が背景にあることがわかる。現実の他者からの眼差し、内在化した他者の眼差し、そして自己と他者を比較する自分自身の眼差し、自我像を頼りに行なう美容行為において眼差しが個人の幾重にも縛っていると言うことができる。

5. 身体加工が唯一の実感をもった自在に操れる現実

身体に関する美的評価の眼差しは、本論で扱う明治維新以降は、主として女性のみを対象とする時代が長く続いてきた。体格や健康といった衛生的評価は性別・年齢を問わないものだが、美的評価の眼差しに関しては女性に、しかも「婚期」という概念にあてはまる年齢にある者に特定の働いてきた。ところが1960年代の若い男性にファッション意識が高まってからは

次第に男性に対しても美的評価の眼差しが同性・異性から向けられるようになり始め、1990年代には男性もかなりの程度この眼差しの下に組み込まれるようになった。ただし依然としてこの眼差しの対象には年齢による「圏外」は存在する。この対象範囲の年齢幅は次第に広がりを見せ、とくに低年齢方向に対する広がりが近年目覚ましい。¹¹⁾ 年齢による区分は女性の方から緩みつつあるものの、平均寿命80年の現在、その人生のうち対象となる年齢は4分の1程度である。(おおよそ10歳から30歳過ぎまで)性別にせよ年齢にせよ、美的価値評価の対象となる範囲に組み込まれることには、美容行為を盛んに行なうことが伴われている。たとえば1960年代のおしゃれに目覚めた若者は当時その集団向けに発売された新しいタイプの整髪料を使用し、¹²⁾ 他の集団とは違ったヘアスタイルをした。また、1990年代には若い男性は眉を抜く・剃る・描くなどの眉の手入れと眉の成形が一般的な行為になった。髪を染めることもごく普通のことになった。脂取紙や毛穴のパック剤・洗顔料などを用いて皮脂を落とすことは若者だけでなく営業職の中年男性にもよく見られる行為になった。体型を整えることも、男性の間でも特別なことではなくなった。¹³⁾

このように美的価値評価の眼差しはその評価に応えるあるいは受けとめるための美容行為と密接に結びついている。1980年代に美容と健康が結びついた意識・行動・産業の国民的ブームを迎えて以来今日にいたるまでこれらの事柄は年を追う毎に盛んになり、今や健康と美容が最大の関心事という人は珍しくない。いずれも起源をたどれば明治維新の政策に行き着き、本論でこれまでに見てきた眼差しの形成と作用の「成果」ということができる。いわば近代の一種の形での「完成」をこうした現象に見ることができよう。それに加えて情報化が進む現代社

会において、身体を通した体験の特性が健康と美容活動への関心と行動を高めていることも見落としてはならない要素である。

メディアの発達、現場(現実)に出来事が生起している場所)に不在のままあたかも現場にあって経験したかのように物事を認識することを実現させる方向で進んで来た。現場にいなくても電話で会話ができ、現場にいなくてもテレビで目撃し、現場まで足を運ばなくてもインターネットで知りたい情報を得るといのように。多種多様なメディアとそこから流れてくる情報を浴びるように生活している現代の日本人にとって、現実には何かが生起しその手ごたえを現実と感じたという実感はどのようにして得られるのだろうか。メディアを通して時間を共有した出来事を体験できる現在、メディアを通した実感と通さない実感の違いはあるのだろうか。¹⁴⁾ こうしたことを考えたとき、身体の特性が明らかになる。哲学において古典的なテーマである痛みの個人性と同様、自己の身体における体験は現実感と個別性において他のものに替えることが不可能である。今後はいざ知らず現在までのところ、いかにメディアが進んだといえも、メディアによって自己の身体における経験を他者と共有できるものではない。それゆえ「現実」や「実感」といった概念の絶対性がゆらいでいる現在でも、自己の身体に生起する体験から得られる感覚(実感)は疑いようもなく確実なものである。(デカルト流に表現すれば「明晰判明」) 身体に関する実感のこうした性質ゆえに、いったんプラスチック・ボディに目覚めたならば、己の身体の形を変化させることを通して現実感を得ることを知るようになるのは自然の成り行きではないだろうか。そして、実感を得ることの難しさが進む現在、己の身体が手軽に実感を得て生きている証が得られる唯一の道具となっても驚くには値しない。人間ひとりの力で

物事や状況を思うように変化させることがどれだけでできるかは、その個人の属する社会的条件によって大きく左右されるが、停滞期にある現在の日本社会では置かれた状況に自分を合わせなければならないことの方が、自分で状況を変えることよりはるかに多いと感じている人が大多数であろう。こうした状況下において、自在に操ることができ、しかもその結果が自分だけでなく他者にも明らか目に見える身体の変工に注目が集まりそこに多くの人が行き着くことは自然の流れと言い得るだろう。身体の変化ほどはっきりと自他ともに認識できる変化は多くはない。しかも変化することによって他者からの眼差しも変わり、「内在化した他者の視線」も変わり、自我像（セルフイメージ）も変化することから気分も一新できる。これほど安直で確実な現実を変える方法がほかにあるだろうか。身体を持った存在であるかぎり、人類の身体変工の歴史は過去も未来も永久に途絶えることがないのはこうしたゆえんである。¹⁵⁾そして、そこには眼差しの働きが存することもまた不変のことである。

6. 今後ますます盛んになる美容、それゆえ眼差しの変化がとるべき道である

近年若い世代や子供の道徳意識に変化が見られるという言説が目立つ。電車内などの公共の場で素顔からメイク顔を完成させる化粧をすることや、ベンチもない道端に坐ってコンビニエンスストアで購入した弁当を食べるなど、礼儀作法とその感覚の点で上の世代が理解できずに驚く行動を当然のことのようにするという批判が多いが、その中に次のような指摘が増えてきた。他人に迷惑をかけないことや恥ずかしさの感覚は現代の若者も持っている。仲間と意識する集団に対してはそうした気遣いが過剰と思われるほど見られる。ところが、仲間と意識しな

い相手はまったく視野になく、その結果無作法や迷惑な行為を人の前でしてしまう。つまり、若者にはかつての「公」がなくなり「世間の目」という意識がなくなりつつある。直前の文章は武田徹の著作を参考に表現したが、¹⁶⁾これは筆者の実感にそぐうものである。美容行為の未来を考えると、こうした意識の変化を視野に入れると、「公」や「世間の目が」なくなるのなら美的基準も個人化して「人は人、自分は自分」となるので身体のコンプレックスもなくなり美容行為はしたい人だけがするものになり、現在のように他者の眼差しを意識して誰もがするような状況はなくなると考えるべきだろうか。答えは否である。「公」はなくなり当人が「世間」と思う集団が狭くなったとしても、「世間」と思う集団があるかぎり眼差しの働きは健在であるから美容行為が完全に個人に内在的なものになったり低下したりするとは考えられない。

比較のために簡単に服装の流行を見ると、1950年代から70年代前半までは流行は世代を問わず一斉に起り、まさに国民的なものであった。次第に流行自体が多様化し、一つのものの流行する集団が小さくなり、1980年代後半には「大衆」に対して「分衆」という語がマーケティングに登場するようになった。流行の多様化と流行集団の小型化は現在も進んでいる。しかし今後小集団が消滅し、服装センスが完全に個人化して流行がなくなるとは考え難い。では身体の美的基準の流行はどのように推移して来たか。身体の美的基準の流行史はいわゆる美人像の変遷である。¹⁷⁾本論では美人像の内容は問題ではなく、そこにおける集団の推移が問題である。1970年代にアイドルタレントが登場し、世代による流行の分化が始まった。1980年代には「熟女」という語が流行し、新しいジャンルが加わることによって世代による分化がさらに進んだ。現在も世代別に特定の人物に人気が集まる傾

向が見られるが、それにもかかわらず、どの世代にも共通した傾向が顕著である。いくつか挙げると、若々しいこと、整った顔、めりはりのあるボディライン、「首」がつく名称の身体の部分が締まっていること、清楚な雰囲気等である。¹⁸⁾ 服装の流行が分化するのとは反対に、美人像においては共通項が一致する傾向が近年になるほど進んでいるように見受けられる。これも身体の美的評価の眼差しの共有化とプラスチックボディ意識の浸透の産物と考えられる。

そして、これらの浸透にはマスメディアが大きな役割を果たしている。前節で見たように社会状況が身体への関心を促進し、マスメディアによって美的基準となる形態とその社会的価値と自分自身の身体を用いて基準形を実現するための努力の「すばらしさ」を刷り込まれ、それらが浸透した眼差しで自分自身の身体を認識する。温泉に行くと実に多様な皮膚の色と体型をした同性に出会って日本人と人間の多様性に驚くが、入浴が個室化し、マスメディアからは絶えず理想の身体を浴び続け、¹⁹⁾ メディアを通して他者と触れ合うことが多いと、自己の身体を見るときにも他者の身体を見るときにも、その眼差しは流行中の理想の身体像に照らし合わせて美的評価を下す方向に偏りがちである。したがってプラスチックボディは意識の上でも行為の上でもますます進み、美容産業の今後も大いに安泰であると考えられる。

そこで、こうした事態をふまえて、今後の美容意識と行為のあるべき方向はどのようなものだろうか。²⁰⁾ 目下イタリアに端を発するスローフード運動から始まって、「スロー」が今後のあるべき生活のキーワードとして注目され始めている。目的優先の、将来のよき状態のために現在を我慢して楽しみを先送りする生活を脱して、「いま・ここ」を味わうことを積み重ねて生きるという考え方だ。合目的性は近代原理の根幹

をなすので、こうした動向は近代の終焉がようやく生活にまで及んだものと考えられる。この思考法を美容に当てはめると、単純に考えれば、美容外科的な手段を使わずに毎日の運動・食事・手入れを通してじっくりと少しずつ目標に近づくこと、しかもそれらの美容行為は義務感や我慢のない、楽しみながら行なうことのできるものにするのが思い浮かぶ。

しかし、これだけでは本論でこれまで見てきたような、眼差しという近代の「装置」によってがんじがらめになっている美容の根本的なあり方には何ら変化はない。眼差しの束縛という息苦しい事態から脱したいのなら、眼差し自体を変えるしか道はない。それにはマスメディアの力を借りることが効果的である。これまでマスメディアによってきわめて狭い範囲の流行の美的身体をシャワーのように浴びせられることで美的価値基準が形成され更新され続けて来たその方法を、今度は新たな使い方に適用すればよい。それは、人間の多様な身体を美的価値の序列をつけずに流すことである。たとえばテレビのトレンドドラマにおいて登場人物の役割と位置づけによって決まったパタンの顔立ちと体型の女優をこれまで登用してきたところを、決まったパタンの女優にせずにあえて様々な顔立ちや体型の女優を登用する方法が考えられる。トレンドドラマだけでなく、広告においても、ファッションショーにおいても、これまでいわゆる「美人」が登場することが常套となっていた場所に様々なタイプの身体を登場させる方法だ。²¹⁾

眼差しを変えるとは、一点に集中する基準を多様化し相対化することである。それが実現できないと、衛生思想の極まった先が第二次世界大戦のファシズム国家であったように、²²⁾ 個人が自分独自の人生を大切にして生きることの許されない息の詰まる社会になることだけは確か

である。

※本文と注では敬称はすべて省略した。

注

1. 主唱者は医師渡辺鼎と雑誌記者石川暎作、設立年は明治18年(1885年)。公的地位にある男性がリードしたことも衛生政策と文明開化の政策に従ったことの証左と考えられる。
2. ポーラ文化研究所『浮世絵美人くらべ』、ポーラ文化研究所、1998年、34～35ページ掲載の松斎吟光『大日本婦人束髪図解』、1885年を参照。このほか頭髪の衛生に関しては、田中聡『ハラノムシ、笑う』、河出書房新社、1991年の140～142ページに掲載されている『衛生修身教科書』(明治41年)と『健康読本 るんてれすと』(大正元年)の記述が当時の様子をよく伝えている。
3. 立川昭二によると「健康」という語が使われるようになったのは明治時代になってからだ。それまでは、江戸時代に普及した「養生」という概念があったが、これは「保身」すなわち病気にならないよう身体の状態を保つために養生することで、健康とは意味が違った。「養生」は目的が別にあるための手段であるのに対して「健康」はそれ自体が目的となりうるし、現になっている。「健康」の語の登場背景については北澤一利『「健康」の日本史』、平凡社、2000年に詳しい。
4. 明治になると錦絵の美人画に代わって美人絵葉書が人気を博した。そこから明治を代表する美人を拾い出すと、人気芸者に二重瞼が多かった。一番人気の赤坂の栄龍、下谷の栄、新橋の照葉(一時映画女優になる)、のぼる、小奴などが二重瞼である。ポーラ文化研究所『浮世絵美人くらべ』、ポーラ

文化研究所、1998年などで写真が見られる。

また、日本初の国際美人コンテスト入賞者(明治40年、1907年)の末弘ヒロ子も二重瞼で鼻が高い。三越のポスターなど美人画の流れを引くポスターに登場する女性も萬龍と末弘によく似た二重瞼で鼻の高い女性が目立つ。

ところで、現在の二重瞼流行には単に美的基準が欧米人の顔にあるからだけではない。明治時代に端を発する「目元ぱっちり」が日本人の美人観にすっかり定着しゆるぎないものになってしまった結果と言えよう。1970年代後半以降欧米人とは異なる基準で美を追究する時代が何度か訪れたが「目元ぱっちり」かつ「鼻高」美人は不変だからである。

5. 衛生展覧会は明治23年(1890年)の第3回内国勸業博覧会における衛生についての展示が初めて、昭和38年(1963年)に赤十字博物館が閉館し衛生に関する展示(常設)が終了したことをもって終わりともみなされている。その前にも見世物小屋において衛生展とあまり変わらない内容のものもあり、その後も各地の「秘法館」において衛生に関する展示が現在まで続いている。田中聡『衛生展覧会の欲望』、青弓社、1994年に準拠。
6. 詳細は次の論文を参照。石田かおり「化粧の力うらおもて」、『研修紀要2001Summer』財団法人日本理容美容教育センター、2001年8月。
7. 外見による社会的位置づけとマスメディアの「先進国」であるアメリカでは、たとえば肥満者は企業の管理職やニュースキャスターに就くことができない。これはそのまま進んだ場合の日本の近未来と考えられる。

8. 「内在化された他者の視線」とその自我像形成に対する働きについて、詳細は以下の著作を参照。石田かおり『おしゃれの哲学』、理想社、1995年、第4章。
9. 日本女性はファンデーション・眉メイク・口紅の3点のメークアップが欠かせない人がきわめて多いし、これが平均的あるいは標準のメークアップで、仕事も買い物もレジャーもパターンは変わらない。これに対して欧米ではマスカラ等のアイメイクと口紅というポイントだけのメイクもよく見られる。しかも、ノーメイクも多いし、一方で過剰とも思われるフルメイクもある。同一人物が行先によってまったく違う程度のメイクを使い分けることも珍しくない。「平均」や「標準」という語は意味をなさない。
10. 「おしゃれ」に「清潔」や「普通の外見」を当てはめることもできる。
11. タレントに小学生が登場するようになってからのことだ。
12. アメリカから導入された製造技術によってそれまで固形で髪がしっかり固まるタイプしかなかった整髪料に液体でさらりとした感触ものが登場し、本文にある世代に爆発的に流行した。
13. 体型を整える人に向けた雑誌は男女共用の体裁を取っているが書店では男性誌の売場に置かれ、読者も「男性誌だが女性が読んでもおかしくないもの」ととらえている。
14. ビデオカメラとつなげたインターネット生中継や動画を送ることができる携帯電話などのパーソナルメディアの普及は個人的な出来事と個人的な感慨を伝えることができるので、メディアを通すか通さないかの区別の敷居を大きく下げる効果がある。
15. 身体変工の目的の名称は「美容」や「健康」、「衛生」、「体格」等さまざまであり、時代によって流行もある。
16. 武田徹『若者はなぜ「繋がり」たがるのか』、PHP 研究所、2002年
17. ここでは話の筋を明瞭にするために「美人」の範囲を女性の話題に限定する。
18. ここに挙げた要素は若さを示す身体的特徴であるので、一口に言えば「若さの美」である。若さと美しさと健康の結びつきに関して詳しくは次の論文を参照。石田かおり「健康美の時代——美と健康の結びつきから見た日本近現代美容史——」、『研究紀要おいでるみんな』14号、資生堂企業資料館、2002年12月。ちなみに、本論は上記論文に収録し切れなかった重要な点である「眼差し」について掘下げたものである。
19. マスメディアからは「理想の身体像」しか流れてこない。そうでないイメージが登場する場合は特定の文脈が社会的に共有されている場合である。
20. 美容における今後のあるべき方向として注6に挙げた論文では、美的価値基準の多様化と、さらにその具体的活動の試みについても記した。この考えに変わりはないが、上記論文があるために本論では繰り返さない記述を心掛けた。
21. 服飾メーカーベネトンの広告での人種による美的基準の相対化の試みや、化粧品メーカーボディショップによるふくよかな女性を登用した広告など、一時的に従来の「美人」とは異なる人物を登用した例は幾つかあるが、継続的なものがないためか美的基準の多様化には至っていない。ユニバーサルファッションも多様な身体のあり方を肯定し受けとめるファッションの考え方と言えるが、この意味における展開についてはまだ現在の時点では未知数である。
22. 詳細は以下の文献を参照。(著者50音順)

石田かおり『化粧せずには生きられない人間の歴史』第2章、講談社、2000年

石田かおり「健康美の時代——美と健康の結びつきから見た日本近現代美容史——」、『研究紀要おいでるみん』14号、資生堂企業資料館、2002年12月

小野芳朗『〈清潔〉の近代』、講談社、1997年

鹿野政直『健康観にみる近代』、朝日新聞社、2001年

三浦雅士『身体の零度』、講談社、1994年

参考文献（著者五十音順）

朝倉喬司『毒婦の誕生』、洋泉社、2002年

石井政之『顔面漂流記』、かもがわ出版、1999年

石田かおり『おしゃれの哲学』、理想社、1995年

石田かおり「化粧の力うらもて」、『研修紀要2001Summer』財団法人日本理容美容教育センター、2001年8月

イヴァン・イリッチ『脱病院化社会』金子嗣郎訳、晶文社、1998年

海野弘『ダイエットの歴史』新書館、1998年

エリザベス・ハイケン『プラスチック・ビューティー』、野中邦子訳、平凡社、1999年

小野芳朗『〈清潔〉の近代』、講談社、1997年

梶原ちおん『きれいになりたい5つのタイプ』ネスコ、1998年

加藤まどか「『きれいな体』の快樂——女性誌が編み上げる女性身体」、『岩波講座現代社会学第11巻』、岩波書店、1995年

鹿野政直『健康観にみる近代』、朝日新聞社、2001年

北澤一利「『健康』の日本史」、平凡社、2000年

下川耿史・家庭総合研究会編『昭和・平成家庭史年表』河出書房新社、1997年

下川耿史・家庭総合研究会編『明治・大正家庭史年表』河出書房新社、2000年

世相風俗観察会編『現代風俗史年表』増補2版、河出書房新社、2001年

瀧澤利行『健康文化論』、大修館書店、1998年

武田徹『若者はなぜ「繋がり」たがるのか』、PHP研究所、2002年

立川昭二『いのちの文化史』新潮社、2000年

立川昭二『からだの文化誌』文藝春秋、1996年

田中聡『衛生展覧会の欲望』、青弓社、1994年

田中聡『ハラノムシ、笑う』、河出書房新社、1991年

辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』、平凡社、2001年

名取春彦『ヴィーナス・コンプレックス』マガジンハウス、1999年

成田龍一「衛生意識の定着と『美のくさり』——1920年代、女性の身体をめぐる一局面——」、『日本史研究366』、日本史研究会編集、1993年。

野村進『脳の欲望 死なない身体』講談社（文庫）2001年

ポーラ文化研究所『浮世絵美人くらべ』、ポーラ文化研究所、1998年

三浦雅士『身体の零度』、講談社、1994年

ミシェル・フーコー『監獄の誕生』、田村俶訳、新潮社、1977年

柳田国男『明治大正史 世相篇』講談社（文庫版）、1993年

山下柚美『美容整形』文芸春秋社、2001年